

聊齋志異促織篇新考

岡 本 不二明

一 はじめに

清初の志怪小説集『聊齋志異』は、全部で四百数十篇にものぼるさまざまな怪異譚や異類婚姻譚を収めるが、中でも「促織」一篇は屈指の名作として知られている。

コオロギ献上にまつわるその物語は、起伏に富んだ構成、緊密な文体、意表をつく着想、そしてとりわけ全篇にみなぎる痛烈な政治批判の点で『聊齋志異』（以下『志異』と简称）の研究者の間に近年多くの議論を呼んできた。

たとえば中国では、解放後から現在まで「促織」のみを対象とした専論は、少なくとも24篇を数える。一九五〇年代以降この作品が高中（高等学校）や初中（中学校）の教科書に採られ、人々に親しまれてきた事情を割り引いても、この数字は『志異』の個別の作品への論及としては、圧倒的に群を抜いている。

ただ付け加えるならば、それらの多くは簡単な紹介や鑑賞の域を出ず、いくつかの本格的な分析も、専ら政治諷刺をめぐる解釈や作者の思想性の

評価などに片寄り、なおこの作品の魅力や価値を十分に語り尽していないように私には思われる。

この小論では、中国のこれまでの研究が積み重ねてきた分析や評価をひとまず置き、この作品の終段の一場面におけるテキストの語句の異同から話を始めるとする。というのも、従来の研究でまったく見過されてきたその異同が、実は作品の主題や、ひいては『志異』のテキストの思想と思いのほか深くかかわっているからである。

二 「促織」の荒筋

まず本文を六つの段落に分け、それぞれに要約とその部分の原文を掲げ、あわせて字数も表示する。なお作者自身の作品解説「異史氏曰く」の部分はいま除く。区切り方は改行を明示している中山大学中文系『聊齋志異』選評小組『評注聊齋志異選』（一九七七年、人民文学出版社）に従う。底本は、この作品に関して先の教科書を始めほとんどの『志異』選注本が採用している通行本の青柯亭刻本（全16巻）。「促織」はその巻7、全字数千三百六十六字。

(1) 明の宣徳年間、宮中ではコオロギ合わせが盛んで、全国からコオロギを献上させた。陝西はもともと産地でなかったが、華陰の知事がへつらつて上納して以来いつも割り当てが来た。役人がそれに便乗して重税を課したため何人も破産する者が出た。

宣德間、宮中尚促織之戲、歲征民間、此物故非西產、有華陰令欲媚上官、以一頭進、試使鬪而才、因責常供、令以責之里正、市中游俠兒、得佳者籠養之、昂其值、居為奇貨、里胥猾黠、假比科斂丁口、每責一頭、輒傾數家之產。八十五字

(2) 村に成名という童子科の万年落第生がいた。お人好しで口べたなため、むりやり村長にかつがれ家財をしぼり取られた上、さらにコオロギ献上の命令を受けた。必死で捜し回ったものの意に叶うものは見つからず、役人に答で打たれ、自殺寸前に追い込まれた。

邑有成名者、操童子業、久不售、為人迂訥、遂為猾胥報充里正役、百計營謀不能脱、不終歲、薄產累盡、會征促織、成不敢斂戶口、而又無所賠償、憂悶欲死、妻曰、死何裨益、不如自行搜覓、冀有萬一之得、成然之、早出暮歸、提竹筒絲籠於敗堵叢草處、探石發穴、靡計不施、迄無濟、即捕得兩三頭、又劣弱不中於款、宰嚴限追比、旬餘、杖至百、兩股間膿血流離、並蟲亦不能行捉矣、轉側牀頭、惟思自盡。百五十二字

(3) たまたま村に巫女が来たので、妻が頼みにゆくとお告げの代わりに一枚の絵をくれた。成名はそれをヒントに村の寺の裏で見たことのないほど立派なコオロギを捕獲することができた。一家は大喜びで納期を待った。時村中來一駝背巫、能以神卜、成妻具貲詣問、見紅女白婆、填塞門戶、入其舍、則密室垂簾、簾外設香几、問者爇香於鼎、再拜、巫從傍望空代

祝、唇吻翕闔、不知何詞、各各竦立以聽、少間、簾內擲一紙出、即道人意中事、無毫髮爽、成妻納錢案上、焚拜如前人、食頃、簾動、片紙拋落、視之、非字而畫、中繪殿閣、類蘭若、後小山下、怪石臥、鉞鉞叢棘、青麻頭伏焉、旁一蠛、若將躍舞、展玩不可曉、然睹促織、隱中胸懷、摺藏之、歸以示成、成反復自念、得無教我獵蟲所耶、細瞻景狀、與村東大佛閣逼似、乃強起扶杖、執圖詣寺後、有古陵蔚起、循陵而走、見蹲石鱗鱗、儼然類畫、遂於蒿萊中、側聽徐行、似尋鍼芥、而心目耳力俱窮、絕無蹤響、冥搜未已、一癩頭墓猝然躍去、成益愕、急逐趁之、蠛入草間、躡蹊披求、見有蟲伏棘根、遽撲之、入石穴中、搯以尖草、不出、以筒水灌之、始出、狀極俊健、逐不得之、審視、巨身修尾、青項金翅、大喜、籠歸、舉家慶賀、雖連城拱壁不啻也、上於盆而養之、蟹白栗黃、備極護愛、留待限期、以塞官責。三百四十八字

(4) 九歳になる成名の子供が、父の不在中に悪戯からコオロギを逃がしたあげく殺してしまった。叱られた子供は井戸に身投げし、死体の前で夫婦が悲嘆に暮れていると、夜中に子供は息を吹き返した。だが意識は依然として不明のままであつた。

成有子九歳、窺父不在、竊發盆、蟲躍擲逕出、迅不可捉、及撲入手、已股落腹裂、斯須就斃、兒懼、啼告母、母聞之、面色灰死、大驚曰、業根、死期至矣、而翁歸、自與汝覆算耳、兒懼而去、未幾而成歸、聞妻言、如被冰雪、怒索兒、兒渺然不知所往、既而得其尸於井、因而化怒為悲、搶

呼欲絶、夫妻向隅、茅舍無煙、相對默然、不復聊賴、日將暮、取兒藁葬、近撫之、氣息惛然、喜寘榻上、半夜復甦、夫妻心稍慰、但見神氣癡木、奄奄思睡、成顧蟋蟀籠虛、則氣斷聲吞、亦不復以兒為念、自昏達曙、目不交睫。百八十六字

(5)翌朝ふと虫の音を耳にした成名が外に出るとコオロギがいた。追いかけて回していると、別の小さなコオロギが懷に跳び込んできた。つまらぬ虫かも知れないと思ったが、試しに村の若者の持つ「蟹殻青」という無敵のコオロギと闘わせた。すると意外にも成名のコオロギが勝った。その決闘の直後、今度は鶏が襲いかかったが、これも鶏冠に跳び乗り撃退してしまった。

東曦既駕、僊臥長愁、忽聞門外蟲鳴、驚起覘視、蟲宛然尚在、喜而捕之、一鳴輒躍去、行且速、覆之以掌、虛若無物、手裁舉、則又超忽而躍、急趨之、折過牆隅、迷其所往、徘徊四顧、見蟲伏壁上、審諦之、短小、黑赤色、頓非前物、成以其小、劣之、惟徬徨瞻顧、尋所逐者、壁上小蟲、忽躍落衿袖間、視之、形若土狗梅花翅、方首長脰、意似良、喜而収之、將獻公堂、惴惴恐不當意、思試之闘以覘之、村中少年好事者、馴養一蟲、自名蟹殻青、日與子弟角、無不勝、欲居之以為利、而高其直、亦無售者、逕造廬訪成、視成所蓄、掩口胡盧而笑、因出己蟲、納比籠中、成視之、龐然修偉、自增慚作、不敢與較、少年团強之、顧念蓄劣物終無所用、不如拚博一笑、因合納鬪盆、小蟲伏不動、蠢若木雞、少年又大笑、試以猪

鬣、撩撥蟲鬣、仍不動、少年又笑、屢撩之、蟲暴怒、直奔、遂相騰擊、振奮作聲、俄見小蟲躍起、張尾伸鬣、直齟敵領、少年大駭、急解令休止、蟲翹然矜鳴、似報主知、成大喜、方共瞻玩、一鷄瞥來、逕進以啄、成駭立愕呼、幸啄不中、蟲躍去尺有咫、鷄健進、逐逼之、蟲已在爪下矣、成倉猝莫知所救、頓足失色、旋見雞伸頸擺撲、臨視、則蟲集冠上、力叮不釋、成益驚喜、掇置籠中。四百三字

(6)コオロギは知事や巡撫をへて朝廷へ献上され、宮中の名だたる虫たちをつぎつぎと破り大活躍した。天子は巡撫に褒美を賜わり、巡撫は知事に「卓異」の称号を与え、知事は成名に賦役免除と県学入学の恩典を授けた。一年余り後、子供が突如意識を回復し、自分は今までコオロギになり闘ってきた、と話した。そこで巡撫も厚くねぎらった。数年後、成名は大名にもまさる資産を築きあげた。

翼日進宰、宰見其小、怒訶成、成述其異、宰不信、試與他蟲闘、蟲盡靡、又試之雞、果如成言、乃賞成、獻諸撫軍、撫軍大悅、以金籠進上、細疏其能、既入宮中、舉天下所貢蝴蝶螳螂油利撻青絲額、一切異狀、遍試之、無出其右者、每聞琴瑟之聲、則應節而舞、益奇之、上大嘉悅、詔賜撫臣名馬衣緞、撫軍不忘所自、無何、宰以卓異聞、宰悅、免成役、又囑學使、俾入邑庠、後歲餘、成子精神復舊、自言身化促織、輕捷善闘、今始甦耳、撫軍亦厚賚成、不數歲、田百頃、樓閣萬椽、牛羊蹄躐、各千計、一出門、裘馬過世家焉。百九十二字

三 『志異』のテキスト

問題は、右の荒筋(6)作品最後の大団円において、子供が突如として意識を取り戻し、自分はコオロギになって俊敏に闘い、いま始めてよみがえった(自言身化促織、輕捷善闘、今始甦耳)、と述べるくだりにある。

何故ならば、作者蒲松齡の自筆手稿本を始め、鈔雪齋抄本、二十四卷抄本は、いずれもこの一段を欠いているからである。

この問題を追求する前に、予備知識として『志異』の各テキストについて少し説明しておこう。詳しくは次の二書を参照のこと。

○張友鶴輯校『会校会注会評本聊齋志異』(以下三会本と略称、一九六二年、中華書局)の「后記」

○駱偉「《聊齋志異》版本略述」(『蒲松齡研究集刊』——以下集刊と略称——第3輯所収、山東大学、一九八二年、齊魯書社)

作者手稿本(以下稿本)

一九四八年東北西豊地区で発見された。ただ惜しむらくは『志異』全体の約半分、4冊237篇(重複を除けば236篇)しか残っていないことである。

「促織」は第2冊所収。大部分の作品は蒲松齡の自筆であるが一部に代筆も含む。また随所に推敲の跡をとどめ、張友鶴は「最後の修訂本」と断定している。いくつかの作品には王漁洋の評語(蒲松齡自筆)や、嘉慶年間と推定される無名氏二人の評語がそれぞれ記されている。

鈔雪齋抄本(以下鈔本)

濟南朱氏抄本——雍正元年(一七二三)に蒲松齡の原稿を手抄——の重抄本で、乾隆十六年(一七五二)の日付を持っている。鈔雪齋とは抄録者の張希傑の室号。全12巻488篇を収め、完本の中では最も作者の意図を反映していると言われているが、稿本との間に細かい異同が少なからず目につく。「促織」は巻4。

二十四卷抄本(以下24巻本)

一九六二年山東淄博で発見された。全24巻474篇を収め乾隆十五、三十年(一七五〇—一七六五)の抄本か、道光同治年間のその重抄本と推定されている。「促織」は巻8。発見が遅れたこともあって残念ながら『三会本』では対校本として使用していない。

青柯亭刻本(以下青本)

乾隆三十一年(一七六六)に趙起杲が、鮑廷博ら五人から出資を得て上梓した、現存中で最も早い刊本。近年まで極めて幅広く流布してきた。全16巻445篇(数え方によつては444篇)で「促織」は巻7。他のテキストに比べると作品の配列の入れ替え、極端に短い記事の切り捨て、語句の改竄などが多い。しかしのちに触れるように通行本としてそれなりの価値を有することは否定できない。

鈔本よりさらに稿本に接近している康熙抄本(山東博物館蔵七〇三号および七一一号抄本)は「促織」を欠く残本。また乾隆三十二年(一七六七)

に出た王金範刻本は胡整之に従えば政治批判の強すぎる内容ゆえに「促織」をとっていないのであろうと言う。乾隆年間の黄炎熙選抄本（残本、四川大学図書館蔵）については筆者未詳。

さて問題の個所を検討しよう。繁雑ながら青本の原文を再掲する。傍線が異同部分。

上大嘉悦、詔賜撫臣馬衣緞、撫軍不忘所自、無何、宰以卓異聞、宰悅、免成役、又囑學使、俾入邑庠、後歲餘、成子精神復舊、自言身化促織、輕捷善鬪、今始甦耳、撫軍亦厚賚成、不數歲、田百頃、樓閣萬椽、……

対するに稿本、鑄本、24卷本は次の通り。

上大嘉悦、詔賜撫臣馬衣緞（作緞）、撫軍不忘所自、無何、宰以卓異聞、宰悅、免成役、又囑學使、俾入邑庠、由此以善養蟲名、屢得撫軍殊寵、不數歲、田百頃、樓閣萬椽、……

青本の方が、稿本等の「由此……」以下13字を削り「後歲餘……」以下29字を加筆しているのがわかる。

「促織」の物語本文における青本と稿本の異同は、『三會本』の校訂に

よれば合計15個所あるが、この部分と次章で検討する荒筋(4)の1個所を除く残り13個所は、作品の本筋に影響ない瑣末な異同である。

この個所は、他に比べ削除と加筆の合計が40字を越える大きなものであることも去ることながら、より強調されねばならないのは、それが「促織」一篇の主題に決定的な変化をもたらしている点である。そして稿本などの抄本に属するテキストと、刊本である青本との対立が、作品の中枢にまで深刻な亀裂を作り出している例は、『志異』四百数十篇を見渡してもほかにない。

繰り返せば、子供が意識を回復しコオロギになって闘ってきたと話す一件は、稿本、鑄本、24卷本になく、それらに遅れる青本に至ってはじめて付け加えられたものである。それはテキスト流布の過程にしばしば見られる誤字脱字でなく、明らかに青本による積極的な改竄であった。

こうした厳然たる事実にもかかわらず、稿本発見以来現在に至るまで、「促織」を古典的名作に位置づける高中語文課本第5冊、初中文学第2冊、最も詳細な校訂をへたはずの『三會本』、おびただしい数の『志異』選注本の類は、ことごとくこの個所を青本に従い、『志異』研究者の多くの発言も青本のストーリーを当然の結末と見なしてきた。

しかし明白な筆誤のような例を除けば、作者のオリジナルなテキストをまず尊重し、それに沿って作品を解読するというのが、常套的な文学研究の在り方ではなからうか。とすれば、「促織」に関する限りその研究や鑑賞の歴史は、一見頗る奇妙な形を呈していると言わざるを得ない。後に述

べるように、たとえそこにそれなりの理由があったにせよである。

青本の語句の変更中、意図的なものについてはおおよそ次の三つに分類することが可能である。

(詳しくは先の張友鶴「后記」を参照。ここでは「后記」があげてない例を示す。)

(i) 先行テキストの明白な脱字誤字の訂正

「巧娘」の鋳本「聴其言、亦土音」↓24巻本青本「亦非土音」、「碁鬼」の稿本鋳本「長生不死」↓24巻本青本「長死不生」等。

(ii) 倒語の訂正、同義語による代替、補足的な語の挿入による文脈の平易化

「魯公女」の鋳本24巻本「河山」↓青本「山河」同じく鋳本「吟呻」↓24巻本青本「呻吟」、「雲蘿公主」の稿本鋳本「進曰主惰」↓24巻本青本「婢進曰主惰」、「俠女」の鋳本24巻本「生至夕、以告少年」↓青本「少年至、生以告」等。

(iii) 清朝の忌諱に抵触しかなない表現の改竄

「仇大娘」の稿本鋳本24巻本「国初立法最嚴」↓青本削除、「竹青」の鋳本24巻本「有満兵過」↓青本満字削除、「沂水秀才」の鋳本24巻本「醉人歪纏、作満州調」の一段↓青本削除等。

ところがいま問題にしている箇所は、右のどれにも該当しない。

このことは、ひょっとしたら「促織」の本文の重要な改竄が、純粹に物語そのものに対する興味から発したものであったかも知れないという予測を、私たちにいだかせる⁽³⁾。

問題の箇所を想起されたい。まず稿本、鋳本、24巻本の方は、主人公の

成名が、コオロギのおかげで知事から賦役免除と県学入学の特典をさずかった話の延長上に、さらに上級の長官、巡撫からもすぐれたコオロギを育てたとして誉められるにすぎない。

比べるに青本は、成名が賦役免除と県学入学の恩恵をこうむったことと同時に、荒筋(4)で人事不省に陥ったままの子供が突然意識を回復し、虫になつて闘つてきたことを告げ、改めて巡撫からねぎらわれている。ゆえにずっと本物のコオロギとばかり思い込んでいた私たち読み手は、土俵際まできて予想外のう、つち、やり、をくらうことになる。むろん子供がコオロギに化していたという告白は、それまで現実的な描写が続いていただけに一見非合理的な飛躍を含むようにも思えるのであるが、筋の流れから見ても少しも都合主義的な辻褃合わせの作為を感じさせないのみならず、むしろコオロギの痛ましい犠牲者たる子供が奇蹟的に回復し、親子ともどもめでたい大団円を迎えることの方が、読み手に強い印象を与えるのである。たとえば双翼の次の発言は、この青本の結末に対するごく平均的な感想であろう。

「物語がここ(賦役免除と県学入学)に至るや、成名の最も苦しい時期は過ぎ去つた。だが悲劇はまだ終っていない。彼の九歳になる子供はどうなつたのか?死んだのか、生き返つたのか?子供はずっと昏睡状態が続いていたが、一年余り後、やつと意識が回復する。——ここにきてはじめて大団円ということになる」(『聊齋志異今談』51頁、一九八二年、百花文芸出版社)

青本の結末は、それが意図したものであったか否か確かめがたいが、結果としては子供が虫を殺した過ちを自分の変身で償い、父親を救済し致富発財（金持ちになる）させ、最後に自分も奇蹟的に甦えろといった、物語にとっても起死回生の結着をつけている。

だが青本の僅かなしかし重大なこの改竄の影響は、ただテキスト表面のストーリーだけにとどまらず、深層の意図にまで及んでいる。具体的に言えば、稿本や他の抄本でなお保たれていた作者の創作意図のあるものが、青本ではカットされているのである。たとえば、主人公をわざわざ成名と名づけた作者の真意を、青本はどうやら見落しているらしいのはその一例である。

『志異』の異類たちが時にその本身を暗示する名で登場すること、すでに別の場所で少し触れたが、同じことは『志異』の人間たちについても言える。

「孤諧」の中で諧謔好きな狐にからかわれる連中は、萬福（おじきの意）陳所見、陳所聞といったわざとらしい名前をつけられ、「蕙芳」の馬二混も混蛋（おわはか）に通じる名前。「金生色」も金氏が木氏を娶ったのち、「金木は相克の関係、どうして良縁であろうか」（但明倫評）の指摘通り、家庭不和のドタバタ騒ぎが繰り広げられてゆく。また「劉海石」では主人公の師である山石道人が、仙人呂洞賓（本名呂岩、岩↓山石）その人であったことが末尾でわざわざ解き明かされ、「顰仙」でも袖の中の別世界で主人公と仙女との間に生まれた子供は、同音を以て秀生と命名される。

實在の人物を除けば、『志異』の特異な作品の主人公に、ことさら遊戯的な虚構めいた名前が多いのは事実である。「促織」の主人公も、「成名（名を成す）」という寓意的な名で私たちに紹介される時、やはりそこに何らかの作者の用意を感じとらないわけにはゆかない。

『論語』子罕篇に由来する「成名」の語は、原典でこそ「限られた専門能力」という否定的なニュアンスを伴うものの、以後一般には一芸に秀で有名になるという価値的な意味で使われてきた。現に私たちは『志異』の中に、「君は餘緒を出し、遂に孺子をして名を成さしむ」（葉生）「則ち生きては名を成さず、死すも猶義を喪えり」（聶政）と、容易にこの種の用例を見つけることができる。とすれば、冒頭で童子科の万年落第生でお人好しの口べたと説明される主人公が、何故「成名」と名づけられねばならなかったのであろうか？

言うまでもなくこの名前の持ち主が、やがて皮肉にもコオロギ飼いの名人として名をあげ財を成す運命をたどるからである。そして、成名をコオロギ飼いの名人とハッキリ記す部分は、荒筋⑥青本が削除してしまったあの個所、「由此以善養蟲名、屢得撫軍殊寵」以外にない。

この一段を不用意に切り捨てた時点で、青本はすでに作者蒲松齡の注意深い布石の一つを、見逃してしまったのである。

四 「促織」の主題

作品末尾のテキスト間の異同は、さかのぼって荒筋④、自殺騒動の子供

に対する扱い方と連動している。

まず青本を見てみよう。傍線が問題の個所。

日將暮、取兒藁葬、近撫之、氣息惓然、喜寘楊上、半夜復甦、夫妻心稍慰、但見神氣癡木、奄奄思睡、成顧蟋蟀籠虛、則氣斷聲吞、亦不復以兒為念。

結末で奇蹟的に意識を取り戻すことと呼応して、ここではその前提となる子供の昏睡状態をさりげなく強調している。

対するに稿本、鑄本、24巻本は、

日將暮、取兒藁葬、近撫之、氣息惓然、喜寘楊上、半夜復甦、夫妻心稍慰、但蟋蟀籠虛、顧之則氣斷聲吞、亦不敢復究兒。

と、夜中に子供が蘇生したことを記すのみで、何の後遺症にも言及していない。稿本等のテキストが子供の奇蹟的な回復の一段を欠くのは、この荒筋(4)で完全に蘇生しているゆえにむしろ当然といえる。

増田渉がその邦訳で、「だが、子供は痴呆のように、昏々として眠りつづけている」の個所に注をつけ、「この部分は底本(三會本——岡本)には欠けているが、青柯亭本によつて補った。この部分がないと、後の「正気にもどる」ということと照応しない」というのは確かに正しい。この部

分のみ青本をとらない『三會本』や任訪秋『聊齋志異選講』(一九八一年、河南人民出版社)などは、稿本と青本を折衷するあまり話の平仄が合わなくなっている。

そもそも子供の果たす役割は、いずれのテキストも荒筋(4)の自殺未遂の騒ぎまでは共通していた。一旦は成功しかかった虫搜しの展開をぶち壊すのが子供の役目であった。

荒筋(2)、妻の勧めでむりとは思いつつも成名は虫搜しに出かけ、案の定得る所なく帰宅し役人に咎で打たれる。荒筋(3)、村に巡回の巫女が来たため妻が出かけ、お告げの代わりに一枚の風景画(コオロギのいる)をもらってくる。ヒントを得た成名は村のはずれの寺の裏で、絵の通りの立派なコオロギを捕獲。だがこの虫は、荒筋(4)思いがけず子供に殺されてしまう。ここまでの展開を整理してみる。

荒筋(2)妻の勧め↓虫搜し↓失敗

荒筋(3)巫女の暗示↓虫搜し↓成功

荒筋(4) ← 子供の悪戯↓殺さる

繰り返せばどのテキストも、子供はせっかく成就した虫搜しの話を持ち出しに戻ってしまう役割である。苦勞してやっと手に入れた直後のコオロギの死であるだけに、成名に与える衝撃は間違いなく大きい。さらに追い討ちをかけるように、今度は叱られた子供までが自殺をはかる。

だがこのあと、稿本等のように子供が夜中に息を吹き返したことを記すだけであるならば、その子供はひと騒動をおこしたあとで結局その派生的なストーリーにピリオドを打つことになる。

対するに、青本の如く息を吹き返してもなお昏睡状態にあることを強調するならば、父親の不幸が解消されないばかりか、さらに子供まで植物人間と化し新しい悲劇が発生することになる。そしてこの親と子の双方の悲劇は、ラストの子供の回復と告白とによって一挙に解決され読み手を納得させる。青本の方が、悲惨さを増幅した分だけ、いやがうえにもハッピーエンドが大きくなっているのである。

してみれば青本の改竄は、主人公の命名の真意を見落したとはいえ、構成をひきしめ鮮やかな着想を導入した点でむしろ作品全体に一層の深みをもたらしたと言っても過言ではあるまい。

こうしたテキストにおける子供の比重の違いは、必然的にあのコオロギに対する受けとめ方に波及する。

荒筋(5)、精根尽き果てた状態の主人公の耳に、明方ふとコオロギの聲が入る。そして彼はこの虫を追いかけて回しているうちに、別の小さな「土狗」「梅花翅」に似た虫を捕える。

青本では、これがほかでもなく子供の魂の化身であったと後段で解き明かされることで、何故このコオロギが彼の前に出現し、何故彼のために奮闘したのか、改めて納得がゆくのであるが、その一段を欠く稿本等では、コ

オロギの出現はまったく唐突であり、偶然としか表現しようがない。

多くの『志異』選注本や教科書が何のためらいもなく青本をとるのも、稿本等のストーリーのままならば、虫に導かれた主人公の発財致富も詰まる所「偶然」の出会いによって完成されるに過ぎず、周到な設定、緻密な描写、波瀾に富む構成など、練りあげられたこの作品の他の要素に比べ、一篇の契機としては、今ひとつ物足りなさを覚えさせるからである。つまり稿本等では、子供が虫になって父に償うといったような展開の必然性が脱け落ちていくのだ。

しかし、作者蒲松齡は、実にこの「偶然」こそ物語のテーマを示現する眼目と考えていたふしがある。一般にある重要な場面において「偶然」が発生すれば、人間の心理はそれを一つの確率上の問題として片付けにくい。すなわちそれ以上の意味を「偶然」の中に探りたがるものである。

「促織」に即していえば、主人公とあのコオロギとの「偶然」の出会いの背後には、たとえば「天」の意志のようなものが働いていたと解釈することも、あながち的はずれではない。何故なら、作品の末尾に附せられた評言「異史氏曰く」の中に、私たちは次のような言葉を見出すのであるから。

成名は役人に搾取され貧乏になったが、やがてコオロギのお蔭で金持ちとなり、衣服や乗物も立派に整った。初め村長を押しつけられ、役人に答で打たれた時は、誰がこのような結末を予想したであろうか。天がお

そ、ら、く、は、正、直、者、に、報、い、た、う、え、巡撫や知事までもコオロギのおかげを被らせたのであろう。

成氏子以蠹貧、以促織富、裘馬揚揚、當其為里正、受扑責時、豈意其至此哉、天將以酬長厚者、遂使撫臣令尹、並受促織恩蔭。

この作者自ら下す解説に従えば、成名が例のコオロギに出逢い発財していったのは、「長厚者」（正直者）に対する「天」の報恩であつた。

正直者といへば、成名は確かに冒頭でお人好しの口べた（為人迂訥）と紹介されている。そしてこの性格が災して、狡猾な役人からむりやりコオロギ献上の責任者を押しつけられたのであつた。しかしこの「迂訥」の語が表現する、要領の悪い愚直な人間に対して、作者がしばしば限らない共感を寄せているのを私たちは忘れてはいけない。

たとえば「促織」と内容上いくらか交差する「阿宝」の孫子楚は、生まれつき六つ指で「性迂訥」なゆえ「痴」とバカにされていた。そんな彼がある日美女の阿宝に一目惚れし、思い詰めたあげく魂がオウムに化し、彼女のもとに通い続け遂に結婚をかちとる。後には進士に合格、天子のお誉めにもあずかってしまう。「迂訥」な人間が、何度かの試練をへて、最後に発財出世を獲得するという筋の運びは、一部の重複する語句表現や魂が禽獣に変わる趣向などの点で、「促織」との関連をにわせる。

また「蕙芳」は、「其人撲訥（此撲訥本24本稿本諸本作諾）」無他長」という愚鈍な主人公が、仙女の訪問を受け最後は幸福な生活に入る話であるが、異史氏はその運命

を「撲訥」ゆえにかえって仙女に可愛がられることになったのだと説明する。また兄弟奇縁の物語「張誠」でも、継母の虐待に黙々と耐え忍ぶ兄の張訥は、その名の如く「為人迂訥」、「司文郎」の科挙受験生王平子は、「撲訥」で清廉な人柄であつたが前世からの福が薄いため、合格後も出仕できなかった。

物語によりさまざまな運命をたどりながらも、彼らは一様に世間の価値基準からはずれた生き方しかできない点で、『志異』に特徴的な「癖」に取り憑かれ「痴」と称せられた人間たちの隣人でもある。成名もまた彼らの一員であつた。

そしてこうした指標に沿って稿本の意図した「促織」の主題を私たちが推測する時、次のような見取図が浮び上ってくるであろう。

一人のお人好しの貧乏落第生が、たびたび偶然の手ひどい波に翻弄され、たあぐく、最後のどん底で天の派遣したコオロギによって救済され、致富発財する……………。

五 「促織」の本事

『志異』の本事（原話）に関しては、次の諸書にその指摘がある。

○葉徳均「聊齋志異の本事」（『戯曲小説叢考（下）』再録、一九七九年、中華書局）

○轟石樵「《聊齋志異》本事旁証」（前掲『集刊』第1輯所収、一九八〇年）

○汪玢玲「蒲松齡与民間文学」附録、聊齋故事来源一覽表(一)(二)(同右第2輯所収、一九八一年)

ただ残念なのは、いずれも単に原話の存在を指摘するか、せいぜい該当の原文を引用するのみに終り、『志異』とそれらの作品との間のさまざまな比較検討を欠いていることである。この点では多くの専論を持つ「促織」の場合も例外でない。

たとえば「促織」の内容に対して王漁洋は次のような批評を下している。

宣徳の御世は、宣宗が聡明で、内閣大臣に三楊(楊士奇・楊榮・楊溥)や蹇義、夏原吉らの重臣がいた。コオロギのような瑣末なものでかくも人民を悩ましたとは思えない。残念だがもともと伝聞や憶測のたぐいではあるまいか。

宣徳治世、宣宗令主、其臺閣大臣、又三楊蹇夏諸老先生也、顧以草蟲織物、殃民至此耶、惜哉(青本無惜哉二字)、抑傳聞異辭耶。

王漁洋は「促織」を事実には拠らない「伝聞異辞」であると却下している。だが清の馮鎮巒の評(以下馮評)をはじめ近年の議論は、作品の設定が歴史的事実に基づくことを指摘し、王漁洋が認識不足であると論断している。この論断は、すぐ後で見るように確かに正しい。

しかし漁洋のために一言弁護するならば、彼の真意は、むしろこの作品が明代という時代設定をとっているにもかかわらず、なお為政者一般への

揶揄や諷刺をあからさまにしているため、「伝聞異辞」と疑ってみせることで作品に同調する危険性をかわそうとしたのではなからうか。康熙朝下で相次いだ苛烈な文字の獄を彼の言葉の背後に想定すれば、単に間違いと決めつけられないように私は思う。

漁洋の真意の詮索は措くとして、以下では「促織」の種々の設定を史実に照らしながら考察し、さらに原話と「促織」の物語としての差異を追ってみる。

コオロギ合わせといえば、まず南宋末期の宰相、賈似道のエピソードが有名である。モンゴルの大軍が襄陽を包囲した時でも、彼はなお都の杭州で平然と群妾をひきつれコオロギ合わせを楽しんでいたという(『宋史』(補注一)卷474)。賈似道は『促織経』2巻を残しているが、蒲松齡はのちに述べる明末の『帝京景物略』を介して、その記述を間接的に利用している。

明代に入れば、「促織」の冒頭にあるように宣宗皇帝の宣徳年間(一四二六―一四三五年)にこの遊戯は爆発的に流行した。

常林炎(一)の指摘する明の楊循吉(一四五六―一五四四年、蘇州呉の人)の『吳中故語』(二)によれば、宣徳時代に朝廷から派遣された宦官が各地で収奪をほしいままにし、とりわけ江南第一の都市蘇州では、羅太監なる人物が、蘇州特産の織物、促織、禽鳥花木などを搾取し私腹をこやしたという。

また『明紀』は、同じ時期に宦官の裴可烈が蘇州・松江一帯で「貪暴すること尤も甚しく」、ついに逮捕され京師に送られた事件を記す(宣宗紀

6年11月の条)。

宣宗自身が促織の戯に熱中したこと、公的資料には当然ながら記されていないが、次の各資料には散見する。

○明、王世貞『国朝叢記』(王は一五二六—一五九〇)(豊家驊⁽⁹⁾ほかの指摘)
(蘇州太倉の人)

○明、沈德符『萬曆野獲編』卷24(沈は一五七八—一六四二)(劉世徳⁽¹⁰⁾ほかの指摘)
(浙江嘉興の人)

○明、朱国禎『湧幢小品』卷31(朱は萬曆十七年進士、崇禎五年卒、浙江烏程の人)(楊益⁽¹¹⁾ほかの指摘)
内容はほぼ類似するので『萬曆野獲編』の記事をあげる。

我が朝の宣宗、最も此の戯を爛^爛し、會^會て秘かに詔して蘇州知府の況鍾に千个を進めしむ。一時語りて云わく、促織瞿瞿と叫き、宣宗皇帝要すと此の語今に至るも猶傳われり。蘇州の衛中武弁に、尚蟋蟀を捕うるを以て首虜の功に比し、世職を得る者の有るを聞けり。

『萬曆野獲編』以外の二書によれば、この話は宣徳9年7月のことという。蛇足ながら『明史』の方は、宣徳9年7月兩畿・山東・山西・河南の、コオロギならぬ蝗^蝗の捕獲退治の勅命を記すのみ(宣宗本紀)。

蘇州知府の況鍾は、北宋の包拯などと並んで民間に人気があった「清官」(清廉公正な政治家)。彼は宣徳5年5月拔擢され蘇州に派遣されているが、その彼がこうした勅命を受けたとすれば、何か皮肉な巡り合わせのような感じである。「促織」とのかかわり合いで興味深いのは、右の話の最後の部分、コオロギの捕獲が戦場での「首虜の功」にも匹敵し、「世職

(世襲の上級職)」を手に入れた武官さえいたという個所である。このことは、風聞によるとはいえコオロギ献上による成名の発財出世が、まんなら根拠のないものでもないことを私たちに示唆する。

宣徳以後もコオロギ合わせへの言及は、各資料に見られる。萬暦年間の劉若愚『明宮史』——『酌中志』の抜粹——は、宮中の宦官たちが毎年七月この遊びに興じたことを、同じく萬暦の蔣一葵『長安客話』⁽¹³⁾も、京師の人々がこぞって「溷廁汚垣の中」まで分け入り虫捜しに狂奔したことを伝える。また袁宏道⁽¹⁴⁾がこの『長安客話』と半ば重複する「畜促織」なる一文を書いたのも萬暦の頃である。

さらに下って明末の崇禎年間に刊行された劉侗・于奕正『帝京景物略』も、コオロギ合わせが北京市民の七月の風物詩で、人々がやはり郊外で虫捜しに血まなこになったこと等を記す。

蒲松齡が『志異』の「促織」を書く際、コオロギの種類や生態に関して利用した資料は、馮評や呂湛恩注があげる劉侗「促織志」——『続說郛』所収——ではなく、その原本である『帝京景物略』8巻(巻3胡家村の条)の方であろう。というのもこの書は、蒲松齡が畢際有の屋敷で館師(家庭教師)をしていた時の愛読書の一つであったから⁽¹⁵⁾。

以上から見て、「促織」の冒頭の設定がある程度は歴史的事実に基づき、そのようなことがあり得ても不思議でない雰囲気の中で物語が進められていることが分る。ただし、それはどこまでもこの作品の遠景であり、物語の筋に直接の痕跡を残すまでには至っていない。^(補注2)

「促織」の原話の一つは、早くは馮評が指摘する明の呂岱『明朝小史（一名明小史）』巻6宣徳紀の「駿馬易虫」の条。

さきほどの『萬曆野獲編』の話とは逆に、宣宗時代の過熱したコオロギ合わせの流行がある一家に悲劇をもたらしたことを記す。常林炎は清の陳寿名『統太平広記』昆虫部促織条をあげるが内容は同じ。

帝（宣宗）酷（^こ）る促織の戯を好み、之を江南に取らしむ。價の貴きこと數十金に至る。楓橋（呉県）の一糧長（穀物管理官）郡督を以て覓めしめ、一の最も良き者を得、乗る所の駿馬を用て之と易う。妻謂うに駿馬を虫に易うるは、必ず異有らんと。竊かに之を視らば、躍り出で、雞の為に啄まれ死す。惧れ自ら縊死す。夫歸り、其の妻を傷み、其つ法を畏れ、亦自縊す。

大切な駿馬と交換してまで入手したコオロギを、妻がふとした好奇心から逃がしたあげく死なせてしまい、自責の念から自殺、帰宅した夫も絶望のあまり妻の跡を追うという、救いがたい悲惨なエピソードである。

この話が「促織」の荒筋(4)に受け継がれていること言を待たない。もちろん細部を見れば、夫の留守中に妻が虫を逃がす（竊視之、躍出）個所は、子供が逃がす（竊發盆、蟲躍擲運出、鑄本のみ竊發盆視之、蟲徑躍出）に変わっている。そのことは劉烈茂も言及しているように、後者では妻は夫を励ます協力者として登場しているゆえに、何も知らない九歳の子供が悪

戯から殺したとする方が、自然な筋立てとなるからであろう。

また逃げ出したコオロギが鶏に啄まれ死ぬ点も、「促織」(5)の例のコオロギが村一番の強敵を破った直後、今度は鶏に襲われるという危機一髪の場合面に転用されている。

『明朝小史』のこの記述は、確かに「促織」と局所的に重なる描写内容を含んでおり、原話の一つであることは間違いないが、聶紺弩や劉烈茂が「底本」と断定するほど「促織」の主題と深くかわっているかどうか私は疑問に思う。

ところでさきに引用した『萬曆野獲編』の文章は、そのあとをさらに次のように続けている。

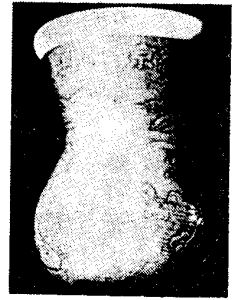
近日呉越の浪子に此の戯を酷る好むもの有り。毎に勝負を賭けるに輒に數百金をもつてし、破家する者の有るに至りては、亦賈（似道）の流毒なり。

コオロギ賭博の弊害は、江南において一段と甚だしかったようである。

蘇州は、宣宗が詔勅を下すほどのコオロギの生産地であり、呉偉業が歌っているように、宣徳年間にはここでコオロギ合わせのための促織盆が大量に作られた（李詡『戒庵老人漫筆』）。図1、2参照。

「蘇湖熟すれば天下足る」の諺の如く、蘇州は明清を通じて天下の台所を自任する中国第一の生産流通都市であった。しかし一方、たとえば乾隆

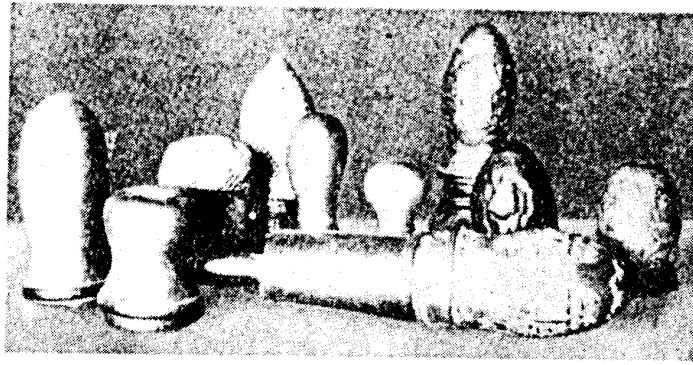
図一 1 促織盆



増川宏一

『賭博Ⅲ』より

図一 2 コオロギの虫籠



三田村泰助『黄土を拓いた人びと』より

年間には蘇州の紊乱した風俗の一つに、鶉合わせやコオロギ合わせがあげられ（顧公燮『消夏閑記摘鈔』⁽²²⁾）、同治年間には上海で闘鶉や闘促織の弊害が記されている（王韜『瀛壖雜志』⁽²³⁾）ことが示すように、コオロギ

賭博に言及する記事の多さは、この地方の享樂的な消費生活の裏面を語るものでもある。⁽²⁴⁾——ちなみに現代でも、闘促織は香港・タイ・マレーシア・インドネシアなどの国々で行なわれており、一部で熱狂的な人気を保っている。⁽²⁵⁾

「促織」のもう一つの、そしてより重要な原話と私が考えるのは、こうした蘇州のコオロギ賭博に関する奇談である。これもすでに何人かによつて指摘されているが、なお指摘

○清、陳元龍『格致鏡原』卷98所収の、明、王穉登『虎苑』卷下（王は一五三五一・六二二）（蘇州長洲の人）（聶石樵——前掲——の指摘）

○明、謝肇河『五雜俎』卷9（謝は萬曆30年進士）（福建長樂の人）（双翼——前掲——の指摘）

三書の中で最も一次的資料である『庚巳篇』（ここでは『説庫』所収の4巻本による）の記事をあげる。

呉の俗は蟋蟀を闘わすを喜び、多く以て決するに財物を賭す。予の里人（蘇州府下の長洲を指す）張廷芳なる者、此の戲を好み、之を為すも輒ち敗れ、家具を鬻ぎ以て償うに至る。歳歳復然りて、遂に其の産を蕩う。素より玄壇神に敬事するに、乃ち誠を以て禱り、其の困苦を訴う。夜夢みて神の曰うに、爾憂うることを勿れ、吾黒虎を遣わし爾を助けん、今化身し天妃宮の東南の角の樹下に在り、汝之を取れと。張往きて土を掘り、一の蟋蟀を獲たり。深黒色にして甚だ大なり。之を用うるに闘いをもってすれば、勝たざる者なし。旬日の間、利を獲ること喪う所の者の加倍の如し。冬に至り、促織死す。張慟哭し、銀を以て棺を作り之を葬る。

著者の陸粲が『庚巳篇』を書いたのは、嘉靖五年（一五二六）の進士及第以前と推定される。文中の「余の里人張廷芳なる者」という書き方から見て、この話の事件が起きた（？）のは『庚巳篇』が執筆された時点からさかのぼること、さほど遠くない頃と考えても大過あるまい。

話は、蘇州近郊のあるばかり好きな男が、日頃の篤い信仰心ゆえに無敵

だけにとどまっている。

○清、褚人穫『堅瓠集余集』卷1所収の、明、陸粲『庚巳篇』卷2

（陸は一四九四・一五五）（蘇州長洲の人）（汪玠玲——前掲——の指摘）

のコオロギをさずかり賭博に勝つという、素朴な玄壇神信仰にまつわる靈驗譚である。そしてこの話の、家産蕩尽、神のお告げ、天妃宮でのコオロギ捕獲、決闘、勝利、致富という構成が、「促織」の冒頭から大団円に至るまでの布置結構に大きな影響を与えていることは容易に看取できよう。

表1参照。

玄壇黒虎（『庚巳篇』）	促織（『志異』）
張廷芳がコオロギ賭博で家財を失なう。	成名がコオロギ献上役を押しつけられる（結果として家財を失なう）
張が玄壇神に祈る	妻が巫女に祈る
玄壇神のお告げ	巫女の絵の暗示
天妃宮でコオロギを捕える	大佛閣で第一のコオロギを捕える
コオロギ合わせ	家の外で第二のコオロギを捕える
勝利	勝利
失なった金の倍額を取り戻す	コオロギ献上（結果として発財出世）
コオロギの死	※青本のみ 子供の蘇生（コオロギの死？）

表1

そしてここで話を前章の最後へ戻すなら、この靈驗譚の枠組みこそ、さ

きの『明朝小史』の話以上に「促織」の主題を強く規定しているように私には思われる。むしろ「促織」の方は巫女の子言が一度は当りながら結果的にコオロギが殺されるなど、記述分量に比例して展開に綾が多くなっているが、そうした展開を支える物語の基本的な因果応報の構造は両者とも同一である。

すなわち、窮地に陥った張廷芳が日頃の篤い信仰ゆえに神から救われたように、成名も「迂訥」な「長厚者」ゆえ最後に天の派遣したコオロギに救われたのである。

現代中国のほとんどの研究者たちが論及しているように、なるほど作者蒲松齡の意図の一つは、主人公が何度かみじめな虫捜しを行なう場面を、次に掲げるように息苦しく濃密な筆致で執拗なまでに描写し、そのことで以て一人の人間を愚かしくもみじめな状況に追いつめている政治の非情さを暗に批判し諷刺する点にある。

(2)……早に出で暮に歸り、竹筒・絲籠を提げ、敗堵叢草の處に於いて、石を採し穴を發け、計の施さざるはなけれども、迄に濟さず。

(3)……遂に蒿萊中に於いて、側聽徐行し、鍼芥を尋す似し。而して心目耳力は俱に窮まり、絶えて蹤響なし。冥搜未だ已まざるに、一の癩頭の蟊の猝然として躍り去る。成益ます愕き、急ぎ逐けて之を趁う。蟊草間に入り、蹟を躡い抜け求め、蟲の棘根に伏すもの有るを見ゆ。遽かに之を撲まば、石穴中に入る。添くに尖草を以てするも、出でず。筒の水を以

て之に灌ぎて、始めて出す……。

こうした虫の微細な動静や、主人公の一挙手一投足に至る過敏なまでの描写は、読み手の心中に、一匹の虫を求めて地面をはい回る主人公の哀れな姿と心理を彷彿と再現させ、ひいては主人公をそこまで追い込んでいく政治体制そのもののへ憤りを向けさせずにはおくまい。

しかし作者の意図は、なおそれだけに尽きるのではない。この作品後半の、正直者が最後に天の示す機縁により発財するという、どこか民話や伝承の世界にも通じるような現報譚の結末の方こそ、作品の主題をより重く分担しているのではなからうか。⁽²⁹⁾

近年中国の多くの研究者が、この作品のトントン拍子の結果を凡庸な蛇足であると決めつけ、それを蒲松齡の封建制度に対する賛美の表われであると非難したり、正直者に対する天の報いという異史氏の言をとらえて、毒された報恩思想と一蹴したりするのは、各テキストの持つ意図の違いを見過しており、かつ余りにこの物語を近代的な尺度で計りすぎていよう。

稿本のストーリーは、『庚巳篇』などの話を下敷きにしたうえで、それはそれなりに作者の意図や思想を過不足なく投影した物語世界を築いていると言つてよい。

けれども、稿本等と青本とでは、その因果応報譚の仕掛けに微妙なずれが出ているのも事実である。

前者では、あのコオロギの唐突な出現を、正直者の成名に対する天の報

恩と解釈せざるを得ないのに比べ、後者では、成名・子供・コオロギというこの地上の三者が、みごとな因果の輪で結ばれているからだ。

想像を逞しうすれば、おそらく青本の編者は、たとえ最後に救済されるとはいえず、人間が天の導くままに不条理な運命をたどらされることに、言いがたい抵抗を覚えたのかも知れない。

成名が正直者なるがゆえに天から報われるという関係は、青本の編者により、成名が子供から報われる（償われる）関係へと書き換えられた。そしてその結果、この物語そのものは、玄壇神や天という超越的な存在が主宰する靈驗譚や報恩譚から離れ、より人間くさい現実世界の事件に移行してゆくことになる。

六 テキストの誕生

前章までは稿本等と青本との異同が秘める意味を、物語自体の中に読みとり、さらに原話とも比較しつつ検討してきた。だがここでいま一度立ち止まり、青本の改竄について反芻するならば、次のような疑問につき当たろう——一体子供を巡る僅か二個所ほどの改竄で、作品の主題がかくも新鮮に変貌するものであろうか？そもそもこの改竄が、青本の出版者、趙起杲一人のまったく独創的な思いつきから生まれたものであろうか？

結論から言えば、私は松齡の原作そのものにも、改竄を許した責任の一端があると思う。なんととなれば、青本の改竄はある程度稿本の揺れの多い

表現に誘発された形跡があるからだ。

編集者の趙起杲は青本の上梓に際し、鄭方坤が持っていた松齡の原稿の重抄本を底本に、かつて見た周季和の重抄本（節録）などで校勘したと言明しているが、それら諸本がすでに散佚している現状では、改竄者に趙起杲を——より正確には校訂担当者の余蓉裳・郁佩先・趙阜亭の三人を——想定するのが妥当であろう。だが問題は、誰が改竄の手を下したかではなく、誰かに改竄へ踏み切らせるような語句表現をもともとこの作品が内蔵していた、という一点にある。

たとえば荒筋(5)、子供の自殺未遂騒ぎの翌朝、成名はふと家の外で虫の音を耳にし、捜し回った末に小さな見栄えのしないコオロギを捕える。やがて彼のために大活躍することになるこの虫は、さきに子供に殺された虫が「巨身修尾、青項金翅」の堂々たる体軀であつたのとは対照的に、次のようにしきりにその小さな体型を強調されている。

(5) 審らかに之を諦らば、短小、黒赤色、頓に前物にあらず、成其の小を以て、之を劣る、……。

壁上の小蟲、忽ち躍りて衿袖の間に落つ、……。

小蟲伏して動かず、蠢なること木雞の如し、……。

俄に小蟲の躍起し、尾を張り鬚を伸ばし、直ちに敵の領を齧むを見ゆ、……。

(6) 宰其の小なるを見、成に怒り訶る、……。

この見すばらしい小さなコオロギであることの頻繁な強調は、馮評も述べる通り、やがて村の若者の持つ「龐然修偉」たる強力な虫や宮中の名だたる虫たちを、つぎつぎと破つてゆく意外な展開に対する伏線になっているのであるが、と同時に受け取り方次第では、その擬人化されたしぐさや俊敏な行動と相俟つて、そこから読み手に子供を連想させかねない効果も持っている。

たとえばこの虫は、村の若者所有の強敵「蟹殼青」を破つた瞬間、闘盆の中で「翹然と衿り鳴き、主の知に報ずるに似る」と、あたかもリング上で勝ち誇るボクサーのようにひと鳴きするし、宮中に献上されたのちは「毎に琴瑟の聲を聞かば、則ち節に應じて舞う」と、天子の前で音楽に合わせて踊つてみせさえる。これらの戯画に近い、しかし生き生きとしたコオロギの像は、作者が意図したか否かにかかわらず子供との類縁性を強くにおわせる結果になっている。

そもそも第一にこの虫は、出逢いの時からして他の虫の場合のような悪戦苦闘もなく、奇妙にも自分の方から「忽ち躍りて衿袖の間に落つ」と成名の懷中に跳び込んだ。まるで拾ってくれと言わんばかりに、である。子供の魂がコオロギに変身していたとする青本の奇想は、現存の稿本の「促織」が証明する如く、作者蒲松齡にとって思いもかけぬものであった。だがこの作者の意図を越えた青本の改竄も、突如として強引に挿入されたものではなく、原作の含みの多い思わせぶりの表現が引き金となっていた

ことは注意を要する。

加えて『志異』全体を展望すれば、人間の魂が一時的に動物に变身するというモチーフは決して乏しくない。すでにあげた「阿宝」の主人公は一目惚れのため魂がオウムに化して美女のもとへ赴くし、「向杲」の主人公も虎に変わって兄の復讐を遂げたのち、再び人間に戻り「虎は即ち我なり」と家人に告白する。あるいは「彭海秋」の丘生が馬にさせられ「杜小雷」の人妻が豚になる例もある。

「促織」は『志異』四百数十篇の中でとび抜けてすぐれた作品でありながら、一人の作者の手になるという点で当然他の作品とも文体、構成、発想などのどこかに連続性を持つ。⁽³³⁾ してみれば青本の改竄は、確かにこの「促織」自体の微妙な表現に魅せられて行なわれながら、その一方では他の作品の往々見せる離魂変身のモチーフも改竄者の脳裏に去来していたとも考えられる。

顧みるに、稿本の周辺の抄本は、なお個人用のテキストの段階にとどまっていた。そこでは基本的に原作の忠実な伝達が念頭に置かれていたと思われる。だが青本の編集者趙起杲は、鮑廷博ら五人から出資を得て営利的な刊本として大量出版するにあたり、不特定多数の読み手を想定した上でもう一度『志異』を洗い直したはずである。

作品順序の改編や語句の変更など、青本の恣意的な編集方針は、何よりも作者の意図を神聖視し、その意図の無垢な発現に作品の窮極的な価値を認めようとする立場からすれば、厳しい批判を受けて然るべきであろう。

だが当の稿本とて、まったく直線的に作者の創作意図を反映しているわけではない。現存の稿本はなるほど全体としてみれば、張友鶴が「最後の修訂本」（『三会本』后記）と断定するのもうなずけるほどに一応は完成稿の域に達しているように見える。しかし、たとえば二度も書き直している部分（「青梅」）や、二百字近く会話をそっくり別の内容に書き変えている部分（「孤諧」）など、個々の作品によってはおびただしい推敲の跡を残すものもある。⁽³⁴⁾

こうした稿本の推敲が物語るテキスト表層のデリケートな振幅は、その震源地である深層構造や意味構造、ひいては作者蒲松齡の内面の動揺を如実に伝えている。それは『志異』が僅かな間に書き上げられたものでなく、作者の生涯の中、早年から晩年にかけての長い期間にわたって書き継がれ、書き改められた事情が惹起した、必然的な現象とも言える。⁽³⁵⁾

元よりテキストが確たる定稿であつてさえ、そのテキストの意図を特定することは、厳密な意味で不可能に近い。ゆえに現存の稿本のある部分が、まだ次に完全な定稿の出現を予想させるような流動性を含むものであれば、なおさらのことであろう。稿本等の曖昧な表現が改竄を誘発し、その結果として別の意図が作品に発生したとしても、私たちはそれを一概に咎めることはできない。そのような揺れの多い曖昧な表現こそ、時として作品を豊饒ならしめている場合もあるのであるから。

そしてこうしたテキスト変容の過程が、すぐれた記されしものにつきまとう宿命の一つであることは、次の例が改めて思い知らせてくれる。

シューベルトの未完成交響楽の第一楽章の最後は、印刷された現在の各種の楽譜によれば、すべてデイミヌエンドを指示している。だが現代日本の著名な指揮者、岩城宏之は、何故ここがデイミヌエンドして悲しく寂しく終らねばならないのか、長い間不思議に思い、また理解できなかったと言う。

むろん「考えようによっては、悲しい第一楽章の終わりの音量を小さくしていつて、美しい柔らかな第二楽章へという、シューベルトの巧妙な作曲上のテクニクなのか、とも思えるのだ」ったが……。

この疑問は、結局彼自身が、ウィーンで直接シューベルト手稿の楽譜を見て氷解した。デイミヌエンドの「V」は、実はアクセントの「V」の間違いであった。

全ての混乱の責任はシューベルトにある。ぼくが見た限りでは、「未完成」の彼の自筆はきれいだった。非常にていねいに書いてあった。ただ、アクセントの記号が、中途半端に長いのである。

考えてみると、アクセントとデイミヌエンドとは、親類関係にあると言える。人がアクセントを感じるということは、最初の音のアタックが強烈で、その一瞬後からの音の持続が、それより少し弱いからである。強い音で出て、少々長い時間をかけて音量を弱めるのがデイミヌエンドだから、両者の差は紙一重と言うことができるのではないか。

そう思いながらシューベルトのスコアを睨んでいると、どっちでもよ

いという気になってくる。いずれも音楽として美しく、ピタリなのだ。⁽³⁶⁾

けだしテキストは、誕生の瞬間から作者も含めたさまざまな読み手のコンテキストの中で、間断なく再生され、そのたびに変質してゆくが、おそらくすぐれたテキストのみがこの無限の再生に耐えるだけの柔軟な生命力を秘めているに違いない。否、むしろすぐれた作品こそ、逆に新しい解釈や改竄の可能性を絶えず読み手の眼前に示現し続け、読み手の積極的なテクストへの参入を挑発してやまないのではなからうか。

「促織」はその挑発に成功し、『志異』の各テキストの断面を鮮やかに露呈させている、稀少な価値を担った作品であった。

(完)

(1) 「会校本《聊齋志異》校補記」(『文献』一九八〇年第4輯、書目文献出版社)

(2) 実は青本の巧妙な改竄の手口は、あと一個所「仇大娘」(稿本も所収)の中で見られる。これは仇一家が、仲違いする魏氏からさまざまな嫌がらせや陥穽をこうむりながら、結局は運命のいたずらで禍が福となり団円するという話。その中で青本は、ストーリー途中の「旗下」(3回)「親王」(1回)の語を回避するため、盗賊の話を手を勝手に創り出し、前後を調整しながら何個所かに挿入している。ただしこの場合は物語の大勢にまったく影響なく、そのうえ清朝の忌諱を配慮している点で「促織」の本文(物語部分)とは異なる。

(3) ただし「促織」の評語「異史氏曰く」の前半、「天子偶用一物、未必不過比已忘、而奉行者即為定例、加以官貪吏虐、民日貼婦賣兒、更無休止、故天子一跬步、皆

關民命、不可忽也、獨是……」(52字)という齒に衣を着せぬ直言を青本は削除しているが、これが(III)清朝への刺激的な表現の削除によることは明らかであろう。

- (4) 拙稿「『聊齋志異』と菊」第3章参照(『鹿兒島県立短期大学紀要』第33号、一九八二年)
- (5) 増田渉・松枝茂夫・常石茂訳『聊齋志異(上)』320頁、一九七三年、平凡社
- (6) 「吳梅村龔孝升有宣宗御用餞金蟋蟀盆歌、漁洋未之見耶?」
- (7) 「就古典文学的研究方法談『促織』的評論問題」(『文学評論叢刊』第5輯、一九八〇年、中国社会科学出版社)
- (8) 「……宣宗由是知其忠勤可用、時承平歲久、中使時出、四方絡繹不絕、采寶翰辨之類、名色甚多、如蘇州一處、恒有五六人居焉日來、内官羅太監尤久、或織造、或采、促織、或買禽鳥花木、皆倚以剝民、祈求無藝、郡佐懸正少忤、則加捶撻、雖太守亦時訶責不貸也」
- (9) 「『促織』的題材、思想和芸術」(『南京師院學報』一九七八年第3期)
- (10) 「『鬼狐史』『磊塊愁』——『聊齋志異』厄談之一」(『光明日報』一九六一年七月三十日)
- (11) 「從『促織』談起」(『光明日報』一九六五年十二月四日)。楊益斟の本名は吳小如。『古典小説漫稿』再録、一九八二年、上海古籍出版社
- (12) 火集七月の条
- (13) 卷2 閨促織の条。ほかに『燕京歲時記』『北京風俗図譜2』(以上平凡社東洋文

庫)などにも同様の記事がある。

- (14) 錢伯城箋校『志宏道集箋校』卷20所収、一九八一年、上海古籍出版社
- (15) 路大荒整理『蒲松齡集』(一九六二年、中華書局)の『文集』卷3の「帝京景物選略小引」によれば、康熙二十三年畢氏の綽然堂にてこの書を得、その文章に魅せられ節録本を作ったという。『帝京景物略』は崇禎八年初刻で以後明の滅亡した崇禎十七年までの僅か九年間に三度も翻刻されている。
- (16) この文章異同が多い。ここでは次の注(17)からの転引による。鄭振鐸編『玄覽堂叢書』所収『明朝小史』では、コオロギが鶏に啄まれる一段を欠く。
- (17) 「論『聊齋志異』的芸術構思」(『集刊』第2輯、一九八一年)
- (18) 「略談『聊齋志異』的反封建反科學精神」(『文学遺產』一九八〇年第1期)
- (19) 『梅村家藏藁』卷3「宣宗御用餞金蟋蟀盆歌」参照
- (20) 「宣德時蘇州造促織盆、出陸墓鄭莫二家、會見彫鏤人物、妝采極工巧、又有大秀小秀所造者尤妙、鄭家二女名也、又藏蘇州庫中、正德時發出變賣、家君親見」(卷1)
- (21) 宮崎市定「明清時代の蘇州と輕工業の發達」(『明代蘇松地方の士大夫と民衆——明代史素描の試み——』(以上『アジア史研究第4』一九五七年、同朋舎)を参照
- (22) 「……蘇郡五方雜處、如寺院戲館遊船賭博青樓蟋蟀鶴鴉等局、皆窮人大養濟院、一旦令其改業、則必至失業、且流為游棍、為乞丐、為盜賊、害無底止矣」(卷上)
- (23) 「滬城多遊民、……陳金浩衛歌有二首、極道滬城遊民惡習、輕平蟋蟀、重平銀、結伴登場秋興新、拋去花枝纔歇手、提囊又約鬬鶴鴉、不歸葱肆不租田、十市三鄉閑

少年、朝弄畫眉呼鴿子、夜吹笛管撥箏絃」(卷1)

- (24) たとえば明の王脩『君子堂日詢手鏡』(嘉靖元年自序)は、広西横州の人々が「珊瑚」と呼ぶ珍鳥で賭博をすることを述べ「然此鳥好闘、彼人多畜以賭勝負、甚至以鞍馬為注者、如吾地闘促織然」と言う。王脩は蘇州南西50kmほどの呉興の人。

- (25) 増川宏一『賭博Ⅲ』94頁参照、一九八三年、法政大学出版局

- (26) 『庚巳篇』には他に相城(蘇州呉)の劉浩という「性好闘促織」なる男が、蜂の生まれ変わったコオロギを得、賭博に勝つ話を載せる(巻3蜂化促織の条)

- (27) 『五雜俎』が既に長い伝聞をへてこのエピソードを記したことは、「小説、載張廷芳者、……」というくだりが説明している。また同じ条には『庚巳篇』の注(26)の話の一部も収められている。

- (28) 清の顧祿『桐橋倚棹錄』では蘇州虎丘山の仰蘇樓内に天后宮なる建物があるという。天妃官はこれを指すか。

- (29) 前掲、任訪秋(234頁)は、この作品のストーリーの虚構性(巫女の占い、子供のコオロギへの変身)、ロマン主義的描写、ハッピーエンドなどから見て民間故事の影響を指摘するが、それだけでは決め手に欠く。

- (30) 前掲、中山大学中文系『評注聊齋志異選』209頁、雷群明『聊齋芸術談』124頁、一九八一年、江西人民出版社など多数。

- (31) 吳穎「『促織』的思想性」(『語文學習』一九五七年二月号)、李厚基「談蒲松齡對生活的描写和評述」(『光明日報』一九七八年五月二十七日)など多数。

- (32) 『三會本』所収の趙起杲「弁言」参照。

- (33) たとえば構成の点で「促織」と類似する作品をもう一つあげておこう。「医術」の第一エピソードは、貧乏な主人公がひょうたんから駒といった幸運で致富する話。ある時青州太守が病氣となり各県に医者を求め、県令は各村にそれを下達、結局貧民の張某がむりやり推される。彼は太守のもとに送られる途中、ふと飲んだ野菜汁からヒントを得、太守にも飲ませ治癒に成功、一躍名医に祭りあげられ致富発財する。

- (34) 現存の稿本4冊(元来は8冊)は『三會本』の巻数表示によれば、巻1―巻2途中、巻3途中―巻6途中、巻9途中―巻11途中、に相当する。稿本の推敲の厳密な検討は他日を期さねばならないが、いま一言だけ述べれば巻4の前後(「促織」もここに入る)が、題名の変更や本文の推敲個所の多さなど目立つように思われる。

- (35) 『志異』の創作期間の確定は極めて困難であるが、若年から晩年にかけてのかなり長い期間にわたることは間違いない。詳しい議論は以下の論文に譲る。章培恒『三會本』新序(一九七八年、上海古籍出版社新版)及び「『聊齋志異』写作年代考」(『集刊』第1輯、一九八〇年)、劳洪「『蒲柳泉先生年譜』辨疑」(『文学遺產』一九八〇年第1期)など。

- (36) 『樂譜の風景』17頁、一九八三年、岩波書店

- (補注1) 清初の王応奎『柳南統筆』巻1によれば、南明の福王政権にいた馬士英も賈似道同様にコオロギ合わせを好み「蟋蟀相公」と呼ばれたという。

- (補注2) その他コオロギ合わせに触れるものに、明中期の俞允文「蟋蟀賦」明末清初の高承埏「蟋蟀賦」同じく吳綺「閨蟋蟀賦」などがある(以上『御定歷代賦

彙』巻139所収)。とくに呉綺の作品は「促織」と類似する表現を含み興味深い。

(補注3) 玄壇神信仰については沢田瑞穂「黒神源流」(『中国の民間信仰』所収、一九

八二年、工作舎) 参照

附記…本稿作成にあたり衣川賢次(花園大学) 勝股高志(京都大学) 両氏より資料に

関して何度も多くの援助をいただいた。感謝致します。